

2-1. 真空中のマクスウェル方程式を用いて、磁場 B が式 (2.7) で表されること、および、式 (2.8) を満たすことを示せ。

解答 電場が

$$\mathbf{E}(t, z) = \mathbf{E}_0 \cos(kz - \omega t + \phi)$$

で表されるならば、マクスウェル方程式の (2.1a) と (2.1b) より、磁場も

$$\mathbf{B}(t, z) = \mathbf{B}_0 \cos(kz - \omega t + \phi)$$

という形にならなければいけない。あとは、 B_0 の方向と大きさを考える。

E_0 が z に垂直とわかったので、 E_0 の方向を x 方向とする。すなわち、

$$\mathbf{E} = \begin{pmatrix} E_x \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} \cos(kz - \omega t + \phi) \quad (1)$$

とする。 B を

$$\mathbf{B} = \begin{pmatrix} B_x \\ B_y \\ B_z \end{pmatrix} \cos(kz - \omega t + \phi) \quad (2)$$

と表して (式 (2.1d) より、 $B_z = 0$ がわかるが、ここでは B_z のままにしておいた) (2.1a) に代入すると

$$\begin{pmatrix} 0 \\ -kE_x \sin(kz - \omega t + \phi) \\ 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -\omega B_x \sin(kz - \omega t + \phi) \\ -\omega B_y \sin(kz - \omega t + \phi) \\ -\omega B_z \sin(kz - \omega t + \phi) \end{pmatrix}$$

となる。これより

$$B_x = 0, B_y = \frac{k}{\omega} E_x, B_z = 0 \quad (3)$$

であることがわかる。すなわち、 B_0 は y 軸方向を向いており、

$$\mathbf{E}_0 \times \mathbf{B}_0 \parallel \hat{z} \quad (2.8a)$$

となることが示された。

また、 $\omega = ck$ であることがわかっているので (3) より

$$|\mathbf{B}_0| = \frac{1}{c} |\mathbf{E}_0| \quad (2.8b)$$

もすぐに示せるが、 $\omega = ck$ がわかっていなくても (1) と (2) を (2.1b) に代入することで

$$\begin{pmatrix} kB_y \sin(kz - \omega t + \phi) \\ -kB_x \sin(kz - \omega t + \phi) \\ 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \frac{\omega}{c^2} E_x \sin(kz - \omega t + \phi) \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$$

となるので (2.8b) を導くことができる .

- 2-2. 電磁気学の教科書を参考にして, 分極 \mathbf{p} によって生じる電荷密度 ρ と電流密度 \mathbf{J} について調べ, その物理的な意味を理解せよ .

解答 省略

- 2-3. \mathbf{D} と \mathbf{H} を用いて, 一般的なマクスウェル方程式 (2.27) を導け .

解答 物質中のマクスウェル方程式 (2.20) の \mathbf{J} と ρ に

$$\rho = \rho_f - \nabla \cdot \mathbf{P} \quad (2.21)$$

$$\mathbf{J} = \mathbf{J}_f + \frac{\partial \mathbf{P}}{\partial t} + \varepsilon_0 c^2 \nabla \times \mathbf{M} \quad (2.23)$$

を代入すると (2.20b) と (2.20c) は

$$\nabla \times \mathbf{B} = \frac{1}{c^2} \frac{\partial \mathbf{E}}{\partial t} + \frac{1}{\varepsilon_0 c^2} \left[\mathbf{J}_f + \frac{\partial \mathbf{P}}{\partial t} + \varepsilon_0 c^2 \nabla \times \mathbf{M} \right] \quad (4)$$

$$\nabla \cdot \mathbf{E} = \frac{1}{\varepsilon_0} [\rho_f - \nabla \cdot \mathbf{P}] \quad (5)$$

となる (5) の両辺に ε_0 を掛けて整理すると

$$\nabla \cdot (\varepsilon_0 \mathbf{E} + \mathbf{P}) = \rho_f$$

となるので (2.27c) が導かれる .

また (4) の両辺に $\varepsilon_0 c^2$ を掛けて整理すると

$$\nabla \times [\varepsilon_0 c^2 (\mathbf{B} - \mathbf{M})] = \frac{\partial}{\partial t} [\varepsilon_0 \mathbf{E} + \mathbf{P}] + \mathbf{J}_f$$

となるので, (2.27b) が導かれる . (2.27a) と (2.27d) は (2.20a) と (2.20d) と同じなので, 以上でマクスウェル方程式 (2.27) が導かれた .

- 2-4. 式 (2.28) を縦波の式と横波の式に分解して, 式 (2.29) を導け .

解答 電場 \mathbf{E} と分極 \mathbf{P} を, 横波と縦波に分解して

$$\mathbf{E} = \mathbf{E}_T + \mathbf{E}_L$$

$$\mathbf{P} = \mathbf{P}_T + \mathbf{P}_L$$

と表し, 磁場 \mathbf{B} については, 横波 \mathbf{B}_T しかないので, そのまま \mathbf{B} で表す .

(2.28a) は

$$\nabla \times (\mathbf{E}_T + \mathbf{E}_L) = -\frac{\partial \mathbf{B}}{\partial t}$$

となるが, $\nabla \times \mathbf{E}_L = 0$ なので

$$\nabla \times \mathbf{E}_T = -\frac{\partial \mathbf{B}}{\partial t} \quad (2.29a)$$

となる.

(2.28c) は

$$\nabla \cdot \left(\mathbf{E}_T + \mathbf{E}_L + \frac{\mathbf{P}_T + \mathbf{P}_L}{\epsilon_0} \right) = 0$$

となるが, $\nabla \cdot \mathbf{E}_T = 0, \nabla \cdot \mathbf{P}_T = 0$ なので

$$\nabla \cdot \left(\mathbf{E}_L + \frac{\mathbf{P}_L}{\epsilon_0} \right) = 0 \quad (2.29d)$$

となる.

(2.28b) は

$$\nabla \times \mathbf{B} = \frac{1}{c^2} \left[\frac{\partial}{\partial t} (\mathbf{E}_T + \mathbf{E}_L) + \frac{1}{\epsilon_0} \frac{\partial}{\partial t} (\mathbf{P}_T + \mathbf{P}_L) \right]$$

となるが, この式を縦波成分と横波成分の2つの式に分解する. 左辺は横波なので, 横波成分は

$$\nabla \times \mathbf{B} = \frac{1}{c^2} \left(\frac{\partial \mathbf{E}_T}{\partial t} + \frac{1}{\epsilon_0} \frac{\partial \mathbf{P}_T}{\partial t} \right) \quad (2.29b)$$

であり, 縦波成分は

$$0 = \frac{1}{c^2} \left(\frac{\partial \mathbf{E}_L}{\partial t} + \frac{1}{\epsilon_0} \frac{\partial \mathbf{P}_L}{\partial t} \right) \quad (2.29c)$$

となる.

以上により, 式(2.29)が導かれた.

- 2-5. 1章で導いた屈折率(1.32)を感受率 χ を使って表すと, 式(2.45)になることを示せ. 付録Cを参照せよ.

解答 付録Cのとおりである.

- 2-6. 宇宙空間を埋めつくしている背景放射(輻射)のエネルギー密度は $u = 4 \times 10^{-14} \text{ J/m}^3$ である. この放射の電場の2乗平均値を求めよ. その電場の大きさは, 1Wの携帯電話が発する電場の, どれくらいの距離の強度と等しいか.

解答 電磁場のエネルギー密度は

$$\langle u \rangle = \epsilon \langle |\mathbf{E}|^2 \rangle \quad (2.63)$$

で表されているが、空気中では真空と同じで $\varepsilon = \varepsilon_0$ としていいので

$$\langle u \rangle = \varepsilon_0 \langle |\mathbf{E}|^2 \rangle = 4 \times 10^{-14} \text{ [J/m}^3\text{]} \quad (6)$$

となり、

$$\begin{aligned} \langle |\mathbf{E}|^2 \rangle &= \frac{4 \times 10^{-14}}{\varepsilon_0} \\ &= \frac{4 \times 10^{-14}}{8.854 \times 10^{-12}} \text{ [V}^2\text{/m}^2\text{]} \\ &= 4.5 \times 10^{-3} \text{ [V}^2\text{/m}^2\text{]} \end{aligned}$$

と計算される。電場の 2 乗平均値は

$$\begin{aligned} \bar{E} &= \sqrt{\langle |\mathbf{E}|^2 \rangle} = 6.7 \times 10^{-2} \text{ [V/m]} \\ &= 6.7 \times 10^{-4} \text{ [V/cm]} \end{aligned}$$

となる。この大きさの電場は、宇宙の背景放射の電場として存在している。

また、1W の携帯電話から距離 R だけ離れた場所でのポインティングベクトルの大きさは、半径 R の球の面積で 1W を割った

$$\langle |S| \rangle = \frac{1}{4\pi R^2} \text{ [W/m}^2\text{]}$$

となる。ポインティングベクトルの大きさは

$$\langle |S| \rangle = \varepsilon_0 n c \langle |\mathbf{E}|^2 \rangle \quad (2.64)$$

であり、空気中では $n = 1$ なので

$$\varepsilon_0 c \langle |\mathbf{E}|^2 \rangle = \frac{1}{4\pi R^2}$$

となる。この電場の大きさと、背景放射の電場の大きさが等しくなる R を求めるので、左辺に (6) の値を入れると

$$c \times 4 \times 10^{-14} = \frac{1}{4\pi R^2}$$

となり、距離 R は

$$R = \sqrt{\frac{1}{4\pi c \times 4 \times 10^{-14}}} = 81 \text{ [m]}$$

と求められる。